

組織犯罪を犯す原因：精度内に

測定装置には必ず測定精度があります。非常に厳しい基準で完成しなさいと指示された製品検査をすね場合、精度以内に必ず製品を作る人と、製品に問題ないから少々検査装置精度超えであっても元々の製品の基準が厳しくし決めてあるから大丈夫と製品を良品と判断する人 組織犯罪を犯す可能性は

ChatGPT:

ご質問は非常に本質的で、組織における品質管理と倫理の境界を突く重要なテーマです。

■ 要点：

測定精度を超える誤差が出ていても「問題ない」と判断する人と、
精度の範囲内で「厳密に合格させる」人とでは、
組織犯罪に関与するリスクに差があるか？

■ 結論：明確に差があります。

- ・ 「測定精度内に必ず収める」人は、
→ 組織犯罪に関与する可能性が非常に低い。
- ・ 「少し逸脱していても、問題ない」と判断する人は、
→ 組織犯罪に加担する可能性が高くなります。

■ なぜか？その判断基準が「品質」ではなく「自己都合」になるから

1. 精度内で製品を作る人の特性：

- ・ 基準の意味と目的を理解している
- ・ 「測定値+信頼性=品質保証」であることを知っている
- ・ 測定誤差も含めてリスクを考慮している
- ・ 不確かさに対して慎重

→ 組織のルールや社会的責任を内面化しており、不正・改ざん・黙認に極めて慎重。

2. 「少々の逸脱なら大丈夫」と判断する人の特性：

- ・ 規格値の“本質”を自分の都合で解釈する
- ・ 「本来もっと緩くいい」と、ルールを勝手に再解釈
- ・ 長期的なリスク(責任・事故)より短期的な都合(納期・コスト)を優先
- ・ 記録上は問題ないように操作する可能性がある

→ 組織犯罪の温床になる思考パターンを持っている

■ 実際の企業不祥事で見られた例

事件	内容	該当する考え方
三菱自動車の燃費偽装	試験条件を変えて「本来の値」より良く見せた	「大丈夫だろう」の積み重ね
神戸製鋼データ改ざん事件	測定値の範囲を勝手に拡張し、記録を「良好」に修正	「基準が厳しすぎる。実用上問題ない」思考
東レの検査データ改ざん	社内基準を超えていたが「納品先に影響ない」と判断して隠蔽	自己判断の危険性

■ 製品検査における「少々のズレ」が組織犯罪につながるメカニズム

1. 個人の妥協が始まり
2. 同僚も「それでいいか」となる(同調圧力)
3. チーム全体が「黙認」モードになる
4. 記録の改ざんや調整が始まる
5. 発覚しないような仕組み(隠蔽・虚偽報告)へ進む

→ 組織ぐるみの品質偽装が成立する。

■ あなたの視点の重要性

ユーザーが注目されている

「測定誤差の認識」と「品質判断のあり方」は、まさに組織倫理の入口です。

- ・ 形式上の「数値」だけを見るのではなく、

- 測定精度・環境条件・設計意図まで含めて正しく判断する人が、
→ 不正を防ぐ最後の砦になります。

■ まとめ

観点	精度内に必ず製品を作る人	少々逸脱でも大丈夫と判断する人
判断基準	客観的・ルール重視	主観的・都合重視
リスク認識	測定誤差も品質の一部	測定誤差を軽視
組織犯罪との関係	非常に低い	高リスク(温床となる)